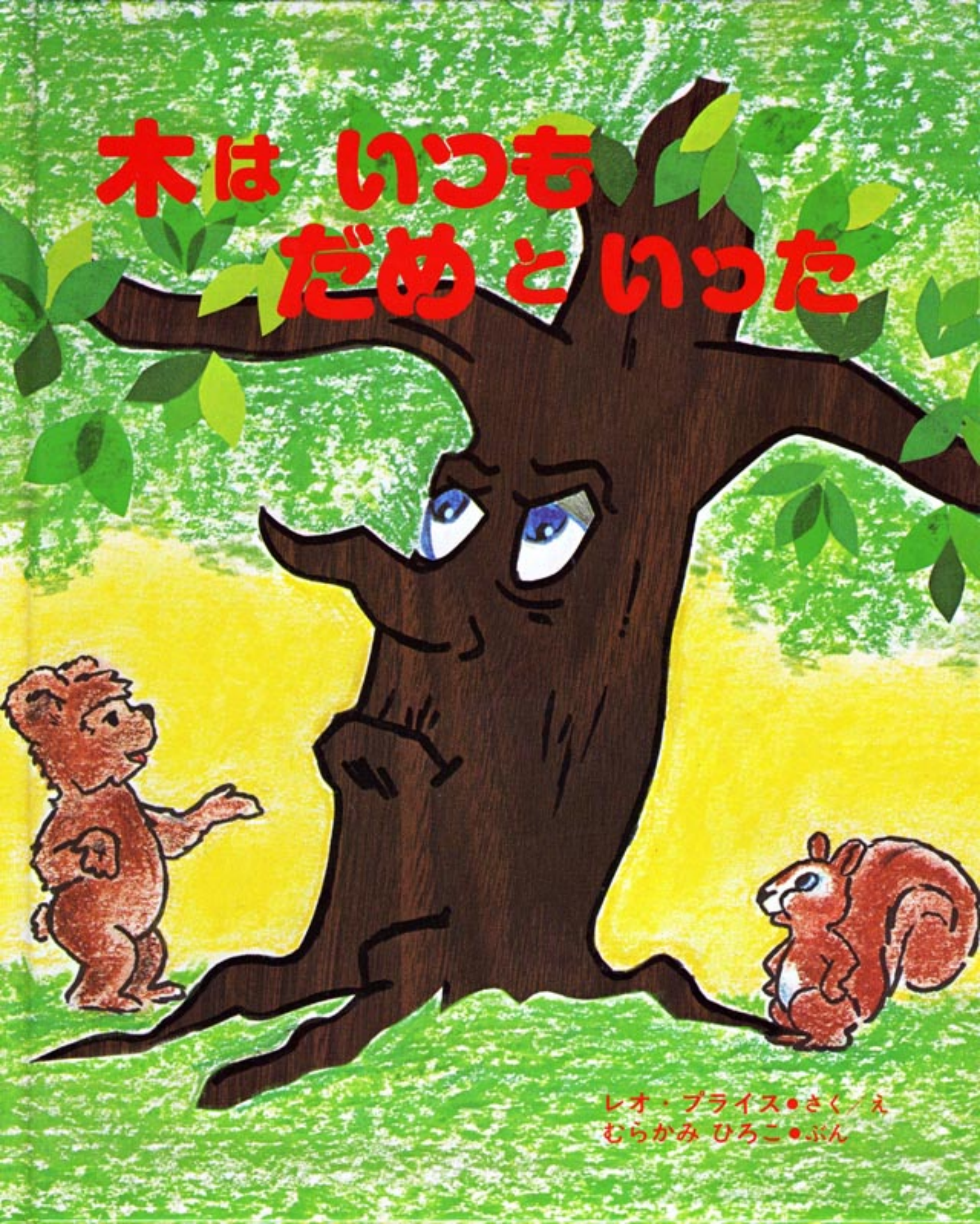


# 木は いつも だめといった

レオ・ブライス●さく／え
むらかみ ひろこ●ぶん

# 木は いつも だめといった

レオ・ブライス●さく／え
むらかみ ひろこ●ぶん

ドナルド・リカード氏とご家族に

*The tree that always said NO!*
*by Leo Price*
*Copyright © Daughters of st. Paul U.S.A.*
*1973. 1977.*

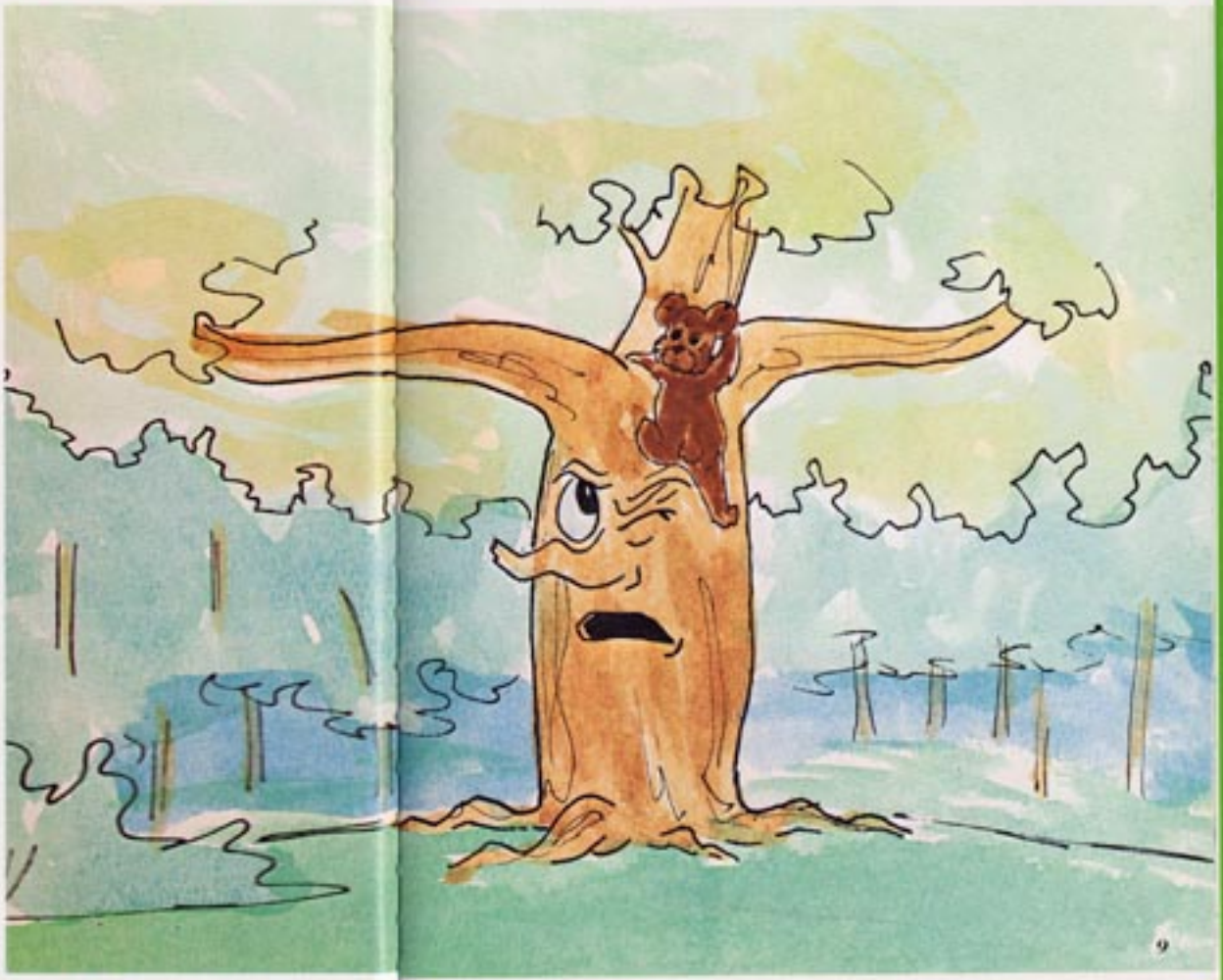
みどりの　もりの　まんなかに、
せの　たかい　木が　あった。
こんもりと　ひろがる　えだ、
すずしい　こかげ。
木は　しって　いた。
もりの　中で、
じぶんが　いちばん　りっぱな
木だと。

二ひきの　りすが　おうちを
さがして　いた。
あったよ、あったよ、もりの
まんなかに。この　木なら　きっと
すてきな　おうちに　なる。
ところが、びっくり、あたまの
上から　大きな　こえが　した。
「そこの　ものども、なにを
しようと　いうのだ？」
りすは　目を　ぱちぱちして　いった。
「あなたに　ぼくたちの
あたらしい　おうちに　なって
もらおうと　おもって。」
「とんでもない。わしは
じゃまされる　ことは　がまんが
ならん。」
「じゃまなんか　けして　しませんよ。
ぼくたちは　とても　おぎょうぎが
いいんです。ぼくたち　きれいな
あたらしい　おうちが　ほしいんです。
おじさんの　大きな　えだ、
きらきら　ひかる　はっぱ、
すてきな　おうちに　なりますよ。」

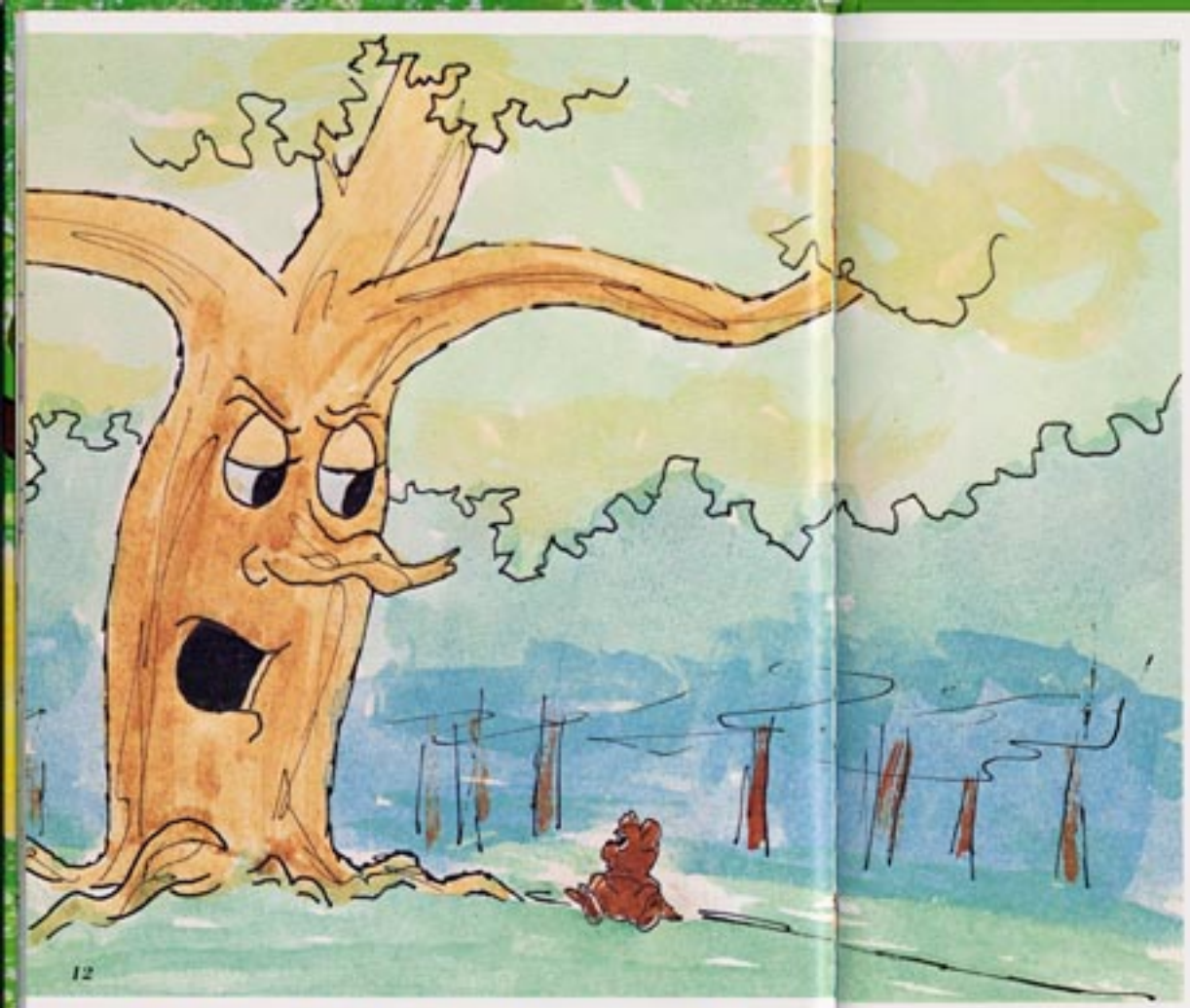
「わしは　おせじは　きらいだ。だめと　いったら　だめだ」
どなりとばされた　りすたちは　とぼとぼ　もりを
とおざかって　いく。こんな　いい　おうちは、もう　とても
みつからないと　かなしく　おもいながら。

りすたちを　おいはらった　木は、もう　けして
じゃまされないぞ、と　けっしんした。
おおきな　あくびを　して　うとうと　いねむり。
ところが　木の　下では、子ぐまが　一びき　かんがえて　いた。
「なんて、いごこちの　よさそうな　木だろう。
そうだ　ぼく　ねむって　いる　あいだに　のぼって　みよう」

いねむりを　じゃまされて
木は　かんかん。
「こら　くまの子、なにを
して　いる。おまえの　とがった
つめが　わしの　耳に　ささって
いるのだぞ」「ごめんなさあい」
と　子ぐまは　すまなさそうに
ちいちゃな　こえで　いった。
「でも、ぼく、どうしても
おじさんの　ふとい　えだの
あなの　中に　みつばちが
すんで　いるか　どうか
みたいんです。ぼく　あまあい
みつの　こと　かんがえると、
もう　なにもかも
わすれちゃうんです」



「れいぎしらずめ。
じつに　めいわくだ。
わしの　えだに　のぼる　ことを　だれが
ゆるした。わしは　どこにも　みつなんか
もって　おらん。」
子ぐまは　木が　いうとおり、
この　おこりっぽい　おじさんは　あまい
おいしい　みつは、もって　いないと
おもった。
あきらめて　そろそろ　おりようと　した
とき　木が　いった。
「たった　いま　おりないと　ふりおとすぞ。」
木は　えだを　おおなみのように　ゆらせた。
みきを　ぶるぶる　ふるわせた。
子ぐまが　えだから　すべりおちるまで。
子ぐまは　木の　ながい　はなに
ひっかかるのを　やっと　まぬかれて、
くさの　上に　すとんと　おちた。





「わかったか　くまの子。
わしは　だめだと　いったら
だめなんだ。」

子ぐまは　しょんぼり
とおざかって　いった。
こんどは　かならず、木の
おじさんに、ことわってから
のぼろうと　おもいながら。